ドドドドーン……猛襲だ。爆彈が我部隊の前後左右に炸裂する。凍つた土が空高く吹き飛ばされる。

「生意氣千萬、片つ端から、射落せッ」

我戰車、裝甲車隊 の砲口、機關銃口は、一齊に外蒙機へ向つて火蓋を切つた。閃々と砲口が火を吹き、彼我の砲聲は耳を聾するばかりだ。

先頭に進んでゐた敵の嚮導機が、急にぐらりと搖れた……我軍の砲彈が、機關部に命中したのだ。見る〳〵安定を失つて機首を下に向け、錐揉み狀態となつて、キリキリと旋回しながら急速度に落ちて來たと思ふ間もなく、ドーンと地轟き立てゝ、我軍陣地の後方に墜落し、たちまち物凄い焰に包まれてしまつた。

と見る、續いて一機、又一機、……澁谷部隊得意の對空射擊に敵すべくもない。相亞いで六機迄も射落されてしまつた。

第一回の爆擊は斯くして失敗に歸した。だがヂンギン汗魂の外蒙飛行士は、なか〳〵屈しない。殘る六機は陣形を立て直して、大旋回をすると、矢繼早の第二回爆擊を開始した。

この第一、第二爆擊で、外蒙機の投下した爆彈は七十發に達したが、我軍は防禦よろしきを得て、さほど大きい損害を被らなかつたのである。

爆擊失敗と見て 殘る四機の敵は、俄然機首を下に傾けて、我陣地に突擊して來た。敵ながら天晴の對地射擊。一千メートルの高空から地上めがけて、ぐん〳〵ぐんと駈け降りながら、タッタッタッタッと息もつかせず機關銃の雨を浴せかけ、地面にあはや激突するかと見る瞬間、ぐいと上げ舵を引いて飛上り、又ぐん〳〵高空に上昇しては、鷲の獲物を追ふ如く、地上めがけてサッと飛び降りる。

「味なことを……」

「今度は落してやるぞ、來い」

高射機關銃は、火を吹いた。遂に二機は力盡きて低空を旋回し、滿洲領内に不時着陸し、殘る二機も今は力及ばずと覺つたか、機首を西に向けて飛去つた。

斯くて四十分間に渉る空陸戰 は、我陸の精鋭の勝利に歸した。ほッと一息ついたのは、まさに午後二時十分……だがこの時、外蒙軍は既に優秀な科學兵器を動員して、第二の攻擊を開始しや

うと、西南わづか一千メートルの近距離に迫りつゝあつたのである。

機械化兵團來る

空襲に對して我部隊　が必死の防戰を續けてゐる間に、裝甲自動車十三臺、騎兵約三百、自動車歩砲兵約一ケ中隊……即ち我軍に倍する優勢な機械化部隊が殺到して來た。

「それッ、地上部隊が來たぞ」

と云ふ間もなく、敵は三方から包圍の隊形を取つて襲ひかゝつた。五百メートルに接近すると共に相互同時に火蓋を切つた。敵が浮足立つたところを見て、突如起る突擊の喇叭と共に、我一隊は敵の主力、他の一隊は左翼、裝甲車隊は敵右翼の騎兵集團に向つて猛進した。

小隊長平本中尉の指揮する小隊の「鬼戰車」と名のある裝甲車は、挺んでゝ騎兵團の眞唯中に飛び込んだ。鬼戰車の車體から半身を乘り出して、中尉は敵狀を偵察しながら、前後左右の敵騎を散慘に擊ち捲つた。名にし負ふ蒙古騎兵も散を亂して仆れた。

「主力に合せよ」

の命令が下つた。その時中尉部下の裝甲車一臺が機關に故障を生じて、ぴたりと止つたまゝ微乏搖ぎもしなくなつてしまつた。

「どうしませう」

「よし、俺の車に繋げ」

「主力に遲れます。危險です」

實際まだ戰鬪は繼續　されてゐる。愚圖々々してゐると、敵の重圍に陷る惧れがある。だが、中尉は頑としてこの故障車を見棄てなかつた。

「どんなことがあつても、裝甲車を敵に渡しちやあならんッ、日本軍人の恥だぞ」

重い裝甲車を牽引して、「鬼戰車」はのろ〳〵と走りだした。

この樣子を見てゐた敵の裝甲自動車隊は、猛然と追擊して來た。平本中尉は追ひ來る敵に銃火を浴せながら、尙進行を續けた。

敵の包圍攻擊のため、いつともなく「鬼戰車」と故障車は凹地の積雪地に追込まれてゐた。吹き溜りの雪の中だ。速度が俄に落ちてしまつた。

敵の戰車は得たりと接近して、砲火を我が「鬼戰車」に集注しはじめた。

「面倒だッ」

中尉は砲塔の天蓋を刎ね 上げた。そして雨下する彈丸を物ともせず、壓ひかゝつて來る敵に猛烈な機關銃射擊を行ひ、遂に敵の裝甲車二臺を、美事に破壞した。

然し悲しいかな、味方には機關銃のみで、敵を徹底的に粉碎し得る砲がない。突如、三十七ミリ砲彈が砲塔に命中した、

「しまつた」

續いて一彈、平本中尉とその部下は遂に壯烈な戰死を遂げたのであつた。

反擊して戰車を奪ふ

敵の裝甲車隊を食止 めて、平本小隊が惡戰苦鬪してゐる間に、我軍の集結は迅速に行はれ、反擊の準備は成つた。

第〇中隊の連絡係の任務を帶びた、落合特務曹長は、平本小隊救援に向ふ中隊主力に合するた

め、佐野上等兵等の指揮班を率ゐ、自動車に搭乘して前進中、百メートルの前方に敵の裝甲自動車六臺が現はれた。

「下車ッ、直に散開ッ」

特務曹長の號令一下、我兵は車を飛び降りて雪中に散開した。敵は銃口に火を吹かせながら突進して來る。六十メートル、五十メートル、四十メートル。

「擊てッ」

必死の抵抗だ。敵も一度は後退した。今度は方向を轉じて側面と背後に廻つたと思ふと十字火を浴せはじめた。

「おいッ、敵の戰車を奪れッ、分捕れッ」

叫ぶと共に、特務曹長が、間近く迫つて停止したまゝ、射擊してゐる、一臺の戰車に向つて駈け出した。佐野上等兵がそれに續き、更に數名がその後から突擊して行つた。亂暴と云はうか、大膽不敵と云はふか。

敵の乘員は狼狽した。機關銃も砲も、斯う近寄られては役に立たない。慌てゝ銃眼から拳銃を

突き出し、バンバンバンと釣瓶撃ちに撃つた。

盲撃ちの一弾が 特務曹長の右脚に命中した。

「うン、やつたなッ」

どんと雪の中に、もんどり打つて倒れた。その刹那、佐野上等兵が銃の臺尻を振り上げて、拳銃を突き出してゐる敵の手を、

「えいッ」

ぐわンと撲つた。ぱたりと拳銃を取落す。

「しめたッ」

と、特務曹長が撥ね起きて、ぴたりと装甲車の扉に吸付いた。そして軍刀でぐいと扉を捩ち開ける。扉がばッと開く、一足踏み込んで操縦士の露西亞人の胸板目がけて、剣道二段の腕の冴え、

「くたばれッ」

ずぶりと突き通した。佐野上等兵の銃剣は殘る二人の乘員を、瞬く中に突倒した。敵の乘員は全滅した。

「さあ、乘れッ、皆乘れッ」

と、特務曹長は部下を呼んだ。

呆氣にとられてゐる敵裝甲車隊の中を、分捕裝甲車は、爆々たる機關の音を立てながら驀進しはじめた。

落合特務曹長、佐野上等兵等は、專門家ではなかつたが、平常の訓練が役立つて、美事に分捕裝甲車を運轉することができたのである。

敵の包圍を脱して 後、元來粗製の外蒙裝甲車は故障のため動かなくなつたので、已むなく一同下車し、特務曹長は軍刀を杖にして漸く支隊本部に辿り着き、委細を報告した。

外蒙機械化兵團は、頑強な我部隊の抵抗に力屈して、軈て退却を開始した。ある種の雜誌には徹底的に粉碎されてしまつたとか、全戰車を破壞されて戰場に遺棄したとか、誇大な記事を掲げてゐるが、それは嘘だ、唯、尠からぬ打撃を蒙つて、遂に國境突破を斷念し、タウランの方向に退却したことだけは事實である。

外蒙の背後には蘇聯 がある。蘇聯は外蒙を指導してはゐるが、外蒙そのものではない。外蒙國

軍が、澁谷部隊のため敗走せしめられたといふ丈で、蘇聯の武力を侮るのはまだ早い。

滿蒙國境の風雲は、今も尙、暗澹として空を蔽ふてゐるのである。

松村先生と子供達

寄昆布を拾ひ集めて

怒濤逆捲く太平洋 をまともに受けて、夏でも寒い北海道釧路國濱中村の海岸を、五六人の兒童を連れて歩いてゐる中年の詰襟男があつた。

十一月の空には、雪催ひの雲が低く垂れて、海は沸き立つやうに荒れ狂ひ、風は剃刀のやうに冷たかつた。肩の褪せたサーヂの詰襟姿は、いかにも見すぼらしいが、顏色は健康さうに輝いてどことなく犯しがたい威嚴を備へてゐる。

彼は漫然と遊歩してゐるのではなかつた。波打際を、注意深く見廻しながら、時々腰を屈めては、浪に打上げられた寄昆布を、一本二本と拾つて行く。その後から跟いて行く子供達も、てん

でに寄昆布を拾つて行く。濱邊はどこまでも續いてゐるが、一定の區域の定めでもあるのか、ある場所まで歩いて行くと、詰襟男はそこから引返して來た。

「御苦勞々々々、今日は隨分あつたね」

「校長先生、こんなに……」

「ほう、澤山あつたね」

「僕もこんなに」

「あゝみんな澤山拾つたね、さあそれでは歸りませう。黃海々戰の軍歌を歌つて」

昆布を持つた一隊 は意氣揚々と海岸から村の方へ引揚げて行つた。この詰襟男は、子供達が呼んだ通り、濱中村弁幌戸小學校の校長先生である松村千加雜であつた。子供たちは云ふまでもな

煙も見えず雲もなく
風も起らず浪立たず
鏡の如き黃海は
曇りそめたり束の間に……。

く、その學校の上級兒童たちである。

それにしても一校の校長として、何の必要があつて寄昆布の一つ二つを拾ひに出て來るのだらう。それも一度や二度ではない。十一月に入つてからは、雨の降る日を除いては一日も缺かさず、斯うして毎日々々放課後になると兒童を引連れて、寄昆布を拾ひに出るのだつた。

併も、これは松村校長ばかりではなかつた。全職員がこの海岸を幾つかの區域に分けて、それぞれ兒童を引連れて、拾ひ歩いてゐたのである。何の爲にそんなことをしてゐるのか、それには理由があつた。

愛國心の發露

松村千加羅校長　は熱烈な愛國者であつた。滿洲事變が勃發すると、小學教育が單なる知識の機械的注入に終つてはならないことに氣付き、熱心に愛國心の涵養に努めた。そして、日本の「國防」は結局「空防」でなければならない。陸戰も海戰も、結局空軍の强弱に依つてその勝敗が定る。殊に日ソの關係が危險である今日、ウラジオストックを起點とする空軍の行動半徑内に、日

本の版圖の大部分が含まれる以上、どうしても防空を充實しなければならないことに思ひをひそめた松村校長は「國防即空防」のスローガンの下に、職員と兒童の零細な醵金を集めて、これを陸軍の愛國飛行機「小學生」號製作費の一部として獻納した篤志家であつた。

校長のこの熱誠な愛國心は、最初の中はいろ〳〵の誤解を招いた。村は半農の半漁村で、あまり豐かでないから、僅かの金でも村民は出し澁つた。

「校長さんの道樂にも困る」

さういふ不平も聞えた。然し、校長は、一生懸命に、それらの誤解してゐる人を說いて歩いた。滿洲で、兵隊たちが、どんなに困難な戰ひをしてゐるか、又日本が今どんなに危險な國際的地位に立つてゐるかといふことを、解り易い言葉で說明して聞かせた。

誤解は軈て　溶ける日が來る。校長の熱誠は、貝殼のやうに閉ぢた村民の心を和げずにはゐなかつた。間もなく村では。恤兵金や慰問袋の募集が始まつた。一度ではない。二度も三度も、村から陸軍省恤兵部にそれらの金品が送られ、それは軈て海を越へて、滿洲の野にある兵士を慰めた。

名もない邊境の一寒村奔幌戸は、それに依つて一躍天下に知られる愛國の模範村として賞讃さ

れるやうになつた。松村校長は、自分の熱誠が、この實を結んだことを喜んだが、然し決してそれで自分の仕事は終つたとは思はなかつた。

一時全國を風靡した恤兵熱が下火になつた時、校長は既に次の仕事に着手してゐた。それが寄昆布の拾ひ集めだつた。

同地方の漁家　では、海草の採集を生業の一つにしてゐる。その時期は夏の七月から秋の十月までの四ケ月間で、その他の時期は、濱邊に打揚げられる寄昆布等の海草を拾つて、これで沃度や加里の原料製造をしてゐる。ところが、數量の纏まつたものは兎に角、一本二本の寄昆布や銀杏草は顧みる者がない。松村校長が眼を着けたのはこゝであつた。

「電車賃を儉約して献金してみたところで、それは個人の消費を節約したまでの事で、國家的な大局から觀れば、それで電力の消費が節約された譯でもなく、唯右に在る物を左に移しただけの事であつて、食べる物を節約して軍備の充實に充てるより遙かに劣つてゐる……本統に大局高所から觀て、合理的な献金の方法は、人の捨てゝ顧みない斯うした遺利を拾つて、國家を益すると共に軍備の充實に捧げることである」

さう考へたのだつた。さうして、陸軍に愛國機が盛んに献納されるに反し、

海軍に獻納機の少いこと　を考へ、今度の献金は海軍報國機の製作費に向けることとし、十月の昆布採集期が終ると共に、全校の兒童を便宜幾組かに分け、分擔地域を定めて一本二本の寄昆布を拾ひ集めさせ、自分も亦その兒童たちに打ち混つて毎日々々海岸を歩いてゐたのである。

「塵も積れば山となる……この一本一本の昆布が、巡ては日本の空を守る强力新鋭の報國機になるのだ」

それを思ふと、松村校長の心は、わく〳〵と躍らずにはゐなかつた。兒童たちには、父兄の邪魔にならぬやうに、又決して家事を怠つてまでこれに熱中してはならないと、くれ〴〵も言ひ聞かせた。濫りに父兄を煩して、愛國心の押賣りをすべきでない、といふことを校長は覺つてゐた。純眞な兒童の心と、その愛國心の發露に依る、この生産的な奉仕のみに依つてこれを成し遂げなければならないといふ固い決心があつた。軈て各區域別に、

相當の昆布　相當の昆昆が集まつたので、それを金に替へて校長の所へ持つて來た。松村千加羅は、全部を集めて計算してみた後、それが思ひもかけぬ金額に上つてゐるのを發見して、

「こんなに有つたか、これは駭いた。一本いくらにもならない昆布を集めて、こんなにならうとは思はなかつた」

と叫んだ。職員が校長の机の周圍に集まつて來た。

「見給へ。九圓十錢になつてゐる。濱邊に塵芥のやうに捨てられてゐる寄昆布も、僅かの間拾ひ集めてみると、これだけの金額になるのだ。塵も積れば山となるとは、本統に古人我を欺かずだね」

と、校長は滿足さうに哄笑した。

金は校長が自分のポケットマネー九十錢を添へて十圓とし、これに兒童の作文九通を添へて海軍省へ第一回獻金として送つた。

勿論此の擧には、理解ある村民の、蔭ながらの援助があつたことは云ふまでもない。

むすびの日の丸運動

海軍省では 昭和九年二月の末、松村校長から斯ういふ文面の手紙を受取つた。

「……舊臘。昭和坤生會根室支部より『日の丸辨當、むすびの日の運動』なるパンフレット受領趣旨誠に結構なるを以て、パンフレットをそのまゝ兒童に托し候處、贊成者三十六名を得、月々三錢、五錢、十錢、何程にても快くお出しを願ひ、非常時解消まで繼續させて戴く事に仕り候。……一月分三圓十錢、陸軍省に拜送、本月分は役場に出張の自動車賃を自ら儉約七十錢を加へ金三圓、海軍省拜送の運び仕り候。『愛國日の丸むすびの會』と命名し、學校兒童贊成者の家を訪れ、集金送料金は小職本校在任中奉仕仕り度、獻金は奇の月陸軍、偶の月海軍へと相定め候。『むすび』この言葉に非常の意義見出し居り候。……昭和九年二月二十五日……北海道奔幌戸尋常小學校長松村千加羅……海軍省御中」

氣紛とは言はない までも、熱し易く冷め易い愛國者の多い世の中に、松村校長の如き根氣よき愛國者は稀らしい。斯うした熱烈な銃後の後援があつてこそ、陸、海、空の勇士達は、後顧の憂なく國家の爲に、勇んで死地にも赴くことができるのだ。

のみならず松村校長は、飽き易い兒童や人々の心を飽かせない爲に、常に醵金の方法に目先を變へてゐる點、よく大衆の心理を解した人と言はなければならない。

軍國日本血涙史（終）

（著作權所有）

昭和十一年八月三日　印刷
昭和十一年八月八日　發行

軍國日本血涙史
定價　金貳圓五拾錢

編者　軍事出版社編輯部

發行者　東京市神田區神保町二丁目三番地　村山鐘次郎

印刷者　東京市神田區神保町一丁目四二番地　小林章悟

印刷所　東京市神田區錦町一丁目四二番地　小林印刷所

發行所　東京市神田區神保町一丁目　軍事出版社
電話代表神田一七四〇番
振替口座東京一一二五九二番

不許複製

終